

「明治日本の産業革命遺産 九州・山口と関連地域」の世界遺産登録に向けて



長崎市総務局世界遺産推進室長

た なか よう いち
田 中 洋 一

昭和60年 4月 長崎市役所入所
平成22年 4月 世界遺産推進室長

はじめに

本年6月に「富岡製糸場と絹産業遺産群」が世界文化遺産に登録され、日本全国の注目の的となったことは記憶に新しいところです。

長崎市には「明治日本の産業革命遺産 九州・山口と関連地域」と「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」という2つの世界遺産候補があり、「産業革命遺産」を平成27年、「教会群」を平成28年に登録するため、国、長崎県、所有者など関係機関と連携しながら取り組みを進めています。

今回は、来年の世界遺産登録を目指している「明治日本の産業革命遺産 九州・山口と関連地域」についての取り組みを紹介いたします。（以下、「産業革命遺産」といいます。）

世界遺産とは

世界遺産とは、世界中のすべての人々が共

有し、未来の世代に引き継いでいくべき人類共通の財産であり、「世界遺産条約」に基づき、全世界の人々の共有財産として国際的に保護・保全していくことが義務づけられている「遺跡」や「建造物」、「自然」などを指します。

世界遺産に登録するためには、ユネスコの「世界遺産委員会」で「世界遺産としての価値」、専門的には「顕著で普遍的価値」（Outstanding Universal Value（OUV）と言います。）があると認められることが必要となります。また、将来にわたって保存管理が手厚くなされていくことは言うまでもありません。

登録までの流れ

世界遺産に登録されるまでには、つぎのような手続きが必要となります。

- ① ユネスコの「世界遺産暫定一覧表」への登録

暫定一覧表とは、世界遺産登録に先立ち、各国がユネスコに世界遺産候補としてふさわしい国内資産を選んで提出するリストのことです。

原則として、リストに掲載されていないものを、世界遺産委員会に登録推薦することは認められていません。

「産業革命遺産」は、平成21年1月にユネスコの世界遺産暫定一覧表に記載されました。

② 万全の保護措置／推薦書の作成

資産を国内の法律による万全の保護措置を行うとともに、ユネスコへ提出する推薦書を作成します。

③ ユネスコに「推薦書」の正式版を提出

「世界遺産条約関係省庁連絡会議」や「閣議了解」といった国内の手続きを経て、日本政府からユネスコへ推薦書が提出されます。

「産業革命遺産」は、平成26年1月17日の「閣議了解」で推薦が決定され、1月末に日本政府からユネスコへ推薦書が提出されました。

④ 「国際記念物遺跡会議（ICOMOS（イコモス）」による現地調査

国際記念物遺跡会議（ICOMOS/ Interna-

tional Council on Monuments and Sites）は、文化遺産保護に関わる国際的な非政府組織で、ユネスコ世界遺産委員会の諮問機関です。

各国（世界遺産条約締約国）から推薦された資産は、イコモスが現地調査を行い、専門家の観点から世界遺産委員会に勧告をします。イコモス勧告は「登録」、「情報照会」、「登録延期」、「不登録」の4段階に分かれており、世界遺産委員会での審査に大きな影響を及ぼします。

⑤ 世界遺産委員会での審査

イコモス勧告を踏まえて、ユネスコ世界遺産委員会は、推薦された資産の審査を行い、「登録」「情報照会」「登録延期」「不登録」のいずれかの決議を行います。

平成26年6月の世界遺産委員会では、審査の対象となった36件のうち「登録」が26件、範囲拡大の承認が4件、「登録延期」が5件、範囲拡大の不承認が1件という結果でした。

「産業革命遺産」は、本年9月から10月のイコモス現地調査を経て、平成27年のユネスコ世界遺産委員会において、登録の可否が決定される予定です。まさしく今、登録に向けて大きな正念場を迎えています。

世界遺産登録までの流れ

①ユネスコの「世界遺産暫定一覧表」への登録

②資産の万全の保護措置／「推薦書」の作成

提出年度

③ユネスコに「推薦書」の正式版を提出

次年度

④「国際記念物遺跡会議（イコモス）」による現地調査

次々年度

⑤世界遺産委員会での審査（6月～7月）

① 登録 ② 情報照会 ③ 登録延期 ④ 不登録

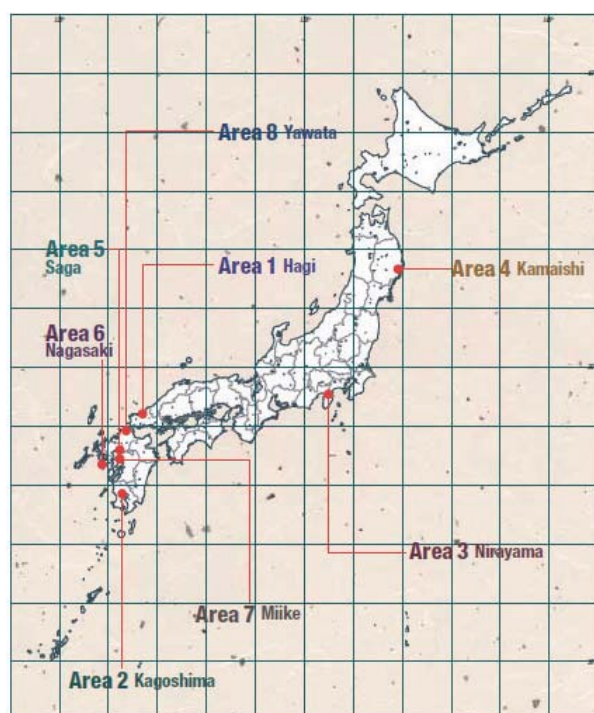
明治日本の産業革命遺産とは

（1）「産業革命遺産」の価値

19世紀半ばから20世紀初頭にかけて、日本は、造船、製鉄・鉄鋼、石炭産業といった基幹産業において急速な産業化を成し遂げました。洋書から得た情報などをもとに試行錯誤

の試みをおこなった幕末期から始まり、明治時代にかけて蒸気機関などの西洋技術の産業への導入、応用に成功する段階を経て発展を続けます。明治後期には、新しい知見を得た国内の人材が育ち、西洋技術を本格的に装備し、大規模な産業システムを形成した産業拠点が形成されました。

日本が西洋の産業革命の受入に成功したことは世界にとって驚きであり、「産業革命遺産」は、このような世界史的に意義のある出来事を、全国8エリアの23資産で示そうとしています。



(2) 構成資産

「産業革命遺産」は、8県11市にまたがる23の資産で構成され、それぞれの資産の価値ではなく、複数の連続性のある資産で1つの価値を証明しようとする、いわゆるシリアルノミネーションという手法をとっています。

エリア1 萩

- ・萩反射炉
- ・恵美須ヶ鼻造船所跡
- ・大板山たたら製鉄遺跡
- ・萩城下町
- ・松下村塾

萩は、幕末に地域社会全体で反射炉、海防用の船の建造など、西洋技術を取り入れる試みを行いました。

萩の遺産群は、こうした諸藩の取り組みを最も明瞭に語る多くの遺跡、建造物が保存、継承されている代表的な遺産群です。

エリア2 鹿児島

- ・旧集成館
- ・寺山炭窯跡
- ・関吉の疎水溝

集成館は、強大かつ独立した薩摩藩主が所有する形で、日本初の産業・軍事工場群として1851年に誕生しました。工場群には製鉄、大砲・小火器製造、造船、紡績工場その他の施設がありました。集成館事業は、西洋技術導入を目的とした大型産業開発のモデルとなっただけでなく、新しいテクノロジーを根付かせる難しさを日本人が身をもって学ぶ貴重な機会を提供しました。

集成館事業に必要な燃料、水源を確保するための「寺山炭窯跡」、「関吉の疎水溝」を含めた3つの資産で構成しています。

エリア3 葦山

・葦山反射炉

ペリー来航の4年後、江戸防衛のため幕府は葦山嶺に反射炉築造を決定し、葦山代官江川太郎左衛門英龍が1854年から1857年にかけて建設しました。葦山反射炉は2連双の煙突を持つ構造で石造りの基礎部分に耐火煉瓦が使われました。

反射炉は、佐賀、薩摩、萩等にも建設されましたが、上部構造が現存しているのは葦山と萩だけです。

日本国内に現存している当時の反射炉としては、最も完全な形で保存されています。

エリア4 釜石

・橋野鉄鉱山・高炉跡

釜石は、日本国内で鉄鉱石が採掘された限られた場所であり、この地で採掘された鉄鉱石を用い、高炉による製鉄が日本国内で初めて成功しました。日本の伝統的な製鉄技術と融合した西洋の高炉技術の伝播を示す遺構は、国内に現存する最古の洋式高炉の遺構です。

橋野高炉跡及び関連遺跡は、西南雄藩を中心とした西洋技術の導入と強いつながりを持ち、後の八幡製鐵所の完成に至る近代製鉄の流れの発端となっています。

エリア5 佐賀

・三重津海軍所跡

三重津海軍所は、佐賀藩が江戸時代末期に、洋式船による海軍教育と洋式艦船の拠点として、有明海に通ずる河川敷に、修船・造船を行う場として設置された施設です。

佐賀藩は歴代長崎防衛の任にあたっており、藩主 鍋島直正（1815～1871）が、藩独自に洋式海軍の教育と洋式艦船の運用を行うため、三重津にあった船屋を拡張し、施設の整備を行いました。

佐賀藩は西洋技術の移転によって製鉄・採炭・造船分野において日本の工業化の礎を築くのに大きな役割を果たしました。

エリア7 三池

・三池炭鉱・三池港 ・三角西港

三池炭鉱（宮原坑・万田坑）は高島炭鉱に次いで日本で2番目に近代化された炭鉱で、良質炭が採炭できることは知られていましたが、地下水が多く採炭は水との闘いでした。

三井財閥は資本力を活かし、当時最先端技術を誇ったイギリスの鉱山機械を導入して坑内の排水システムを整備しました。

大量の石炭を輸出するための物流システムには、鉄道、電気、そして積出港が必要であり、明治政府は1887年に三角西港を築港しました。三角西港は明治政府が手掛けた三大築港の一つで、国の特別輸出港に指定されました。

しかし、三池炭鉱から44キロも離れており港湾設備も不備で非効率だったため、炭鉱管理者の団琢磨は、1908年に有明海に大型船で

も入港できる、ハチドリの形をした三池港を建設しました。

三池炭鉱と三池港は日本人技術者の努力と知恵、応用力が日本の産業化に貢献したことを物語っています。

エリア8 八幡

- ・官営製鐵所
- ・遠賀川水源地ポンプ室

1895年、製鐵所の建設に熱心だった伊藤博文の第二次内閣の時、国会で製鐵所建議案が可決され、明治政府は、筑豊炭田に近い八幡の地に官営製鐵所を建設しました。

建設にあたっては、西欧の優れた技術を研究しドイツのグーテホフヌンクスヒュッテ（GHH）社から生産設備を輸入しました。

日本事務所は、生産設備に先駆けて1899年に建設されました。日本式と西欧式の建築様式を融合させた建物で形は左右対称で赤煉瓦積み屋根には独特のドームが設置されています。

旧鍛冶工場は、製鐵所の建設に必要な機械を鍛造するため1900年に建設されました。

修繕工場は、製鐵所で使う部材の製造や機械の組み立て修繕を行うための工場で1900年に建てられました。

修繕工場と旧鍛冶工場は、現存する日本最古の鉄骨建造物で100年を経てもなお現役で稼働しています。

また、鉄鋼の生産には水が欠かせないため、官営製鐵所の生産拡張計画に対応して、1910年に、八幡製鐵所から11.4キロ離れた遠賀川

の東岸に遠賀川水源地ポンプ室が建てられました。

ポンプ室は、現在も八幡製鐵所に必要な工業用水の最大の供給元として稼働しています。

エリア6 長崎

- ・小菅修船場跡
- ・三菱長崎造船所第三船渠
- ・三菱長崎造船所ジャイアント・カンチレバークレーン
- ・三菱長崎造船所旧木型場
- ・三菱長崎造船所占勝閣
- ・高島炭坑
- ・端島炭坑
- ・旧グラバー住宅

長崎は、スコットランド出身のトーマス・B・グラバーが協力して蒸気機関を用いたスリップドックや炭鉱が導入された地であり、その後三菱合資会社が長崎造船所や端島炭坑を経営するなど民間造船業や海洋炭鉱を発展させた重要な場所です。

特に、長崎造船所は、幕府の洋式船用機械修理工場（長崎製鉄所）が前身であり、明治政府、三菱と主を変えながら発展してきました。明治後期には三菱重工業長崎造船所は、日本最大の民間造船所として発展しました。

●小菅修船場跡

日本最初の蒸気機関を動力とする曳揚げ装置を装備した洋式ドックです。

1869年に、中古の洋船や外国からやってくる

る大型船を修理するため、薩摩藩とグラバーが協力し建設した船舶修理施設で、明治政府が買収後、1887年に三菱の所有になりました。

曳揚げ小屋は、現存する日本最古の煉瓦造建築で「コンニャク煉瓦」が使われています。

曳揚げ装置は、グラバーがスコットランドのアバディーンから輸入したもので、当時のドックにあった船を乗せて引き上げるための台の形状から「ソロバンドック」といわれています。

●三菱長崎造船所 第三船渠

長崎造船所には4つの構成資産があり明治後期の電化以降、本格的に三菱が造船業の基礎を構築した時代を物語っています。

その1つが第三船渠です。

第三船渠は、長崎造船所が電化された後の初めてのドライドックです。日本人技術者により設計され、背後の山を削り造られました。

イギリスから輸入された電気モーターとポンプが4基設置され、そのうち3基は今も現役で稼働しています。

ポンプとモーターには当時最先端の西洋技術が導入されており長崎造船所の技術水準が世界最高水準に急速に達したことを示しています。

●三菱長崎造船所 ジャイアント・カンチレバークレーン

ジャイアント・カンチレバークレーンはスコットランドのアップルビー社製で1909年に竣工した日本初の電動クレーンです。

吊り上げ能力は150トンあり、大型船への機械の搭載、陸揚げに使われました。

特に、1904年にタービンエンジンの国産製造が始まるとタービンを搭載するために大活躍しました。

この型のジャイアント・カンチレバークレーンで現存するのは世界に10基ありますが、その中の3基が今も稼働しており、このクレーンはその貴重な3基の中の1基です。

ジャイアント・カンチレバークレーンの勇姿は世紀を超えて長崎港のシンボルとして異彩を放っています。



ジャイアント・カンチレバークレーン

●三菱長崎造船所 旧木型場

1898年に鋳物製品の需要増大に対応し、鋳型製造用の木型を製作するために建設された木骨煉瓦造二階建の建物で、長崎造船所に現存する最も古い工場です。

1985年、木型場は史料館として改装され、

日本最古の工作機械（長崎製鉄所建設時の1857年にオランダから輸入した「豎削盤」）を展示するなど、長崎造船所の歴史を紹介する展示施設として一般公開（事前予約制）されています。

●三菱長崎造船所 占勝閣

占勝閣は、第三船渠を見下ろす丘上に建設された木造二階建洋館です。第2代長崎造船所長の荘田平五郎の邸宅として1904年に完成しましたが、所長宅としては使用されず、迎賓館となりました。

1905年、軍艦「千代田」艦長の東伏見宮依仁親王がご宿泊の際に「風光景勝を占める」という意味で占勝閣と命名されました。

占勝閣は現在もほぼ創建当時の姿で、迎賓館として進水式・引渡式の祝賀会、貴賓の接待等に使用されています。

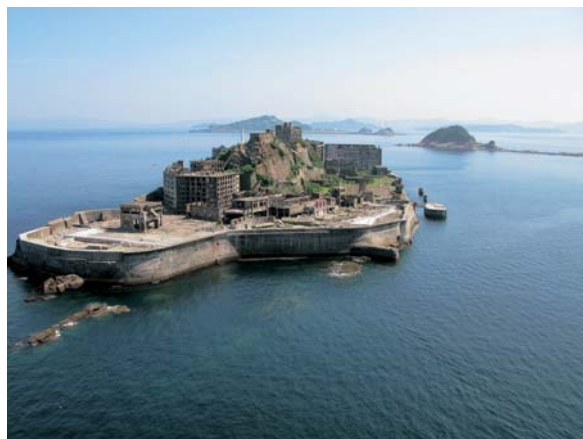
●高島炭坑

幕末から明治にかけて西洋の機械が使えるようになり、石炭の需要が大きくなってきたことから、1869年、佐賀藩はグラバーとともに、長崎港から14.5キロ沖合の高島で炭坑を開発しました。この海洋炭鉱が北溪井坑です。

北溪井坑は、日本最初の蒸気機関を導入した豎坑で、日本の炭鉱近代化の先駆けとなりました。

●端島炭坑

端島炭坑は、高島炭坑の技術を引き継ぎ発展させ、炭鉱の島として開発されました。



端島炭坑（長崎市提供）

明治中期以降に採炭事業が本格的に開始し、1890年からは三菱の所有となり、明治後期の高島炭鉱（高島、端島による海洋炭鉱群）の主力坑となりました。高品位炭を産出し、国内外の石炭需要を補い、明治末には八幡製鐵所へも原料炭を供給しました。

1974年に閉山し、現在は、坑口等の生産施設跡や数次にわたり拡張された海岸線を示す護岸遺構が残っています。島の西側に林立するコンクリート高層住宅群は、大正時代以降に建設されたものであり、世界遺産価値の証明には貢献しませんが、国内外からの注目度が高まっています。

●旧グラバー住宅

1859年、グラバーは、ジャーディンマセソン商会のエージェントとして21歳の若さで来日しました。

グラバーは長崎製鉄所を見下ろす南山手の丘の中腹に自宅兼オフィスを建設し、長州・薩摩・土佐など雄藩の志士たちに西洋の機械、船、武器を仲介するなど、グラバー住宅は技術の情報交流の場となりました。

雄藩は、やがて討幕の中心となりグラバーは日本の産業化に貢献しました。



旧グラバー住宅（長崎市提供）

おわりに

開港とともに栄えた長崎は、独特な文化の香り高い街です。市内には往時を偲ぶ歴史の跡が数多く残されており、市民が誇るべき貴重な財産となっています。これらの財産が世界遺産に登録されることは、それぞれの価値がさらに高まるとともに、観光をはじめとする地域の活性化にもつながっていくものと期待されます。

来年、再来年と長崎の資産が2年続けて世界遺産に登録されることは、大変名誉なことであり、市民・県民の皆様と、世界遺産登録される歴史的瞬間の喜びを分かち合えるように、登録に向けた取組みに全力を注いでまいります。